

『マナス』叙事詩

——キルギス族民間文学の紹介——

乾

尋

二年前、留学生として中国に滞在していた私は、少数民族のキルギス族に長篇の叙事詩が伝えられていることを知りました。そして語り手や研究者たちに会って、その『マナス』と呼ばれる英雄叙事詩の世界を垣間見てきました。そこで、この『マナス』について紹介したいと思います。

『マナス』叙事詩を伝えているキルギス族は中央アジアに住む遊牧民族です。現在、中国では新疆ウイグル自治区のクズルスキルギス自治州に約九万人余が住んでいます。ここは中国の西の端、パミール高原の山ふところですよ。国境を隔てたむこうにはソ連邦のキルギス共和国があり、約百万人のキルギス人が住んでいます。

この高原の遊牧民が、実に長い叙事詩を語り継いでいるのです。中国・新疆のジュスツプ・ママイ氏の語った資料からは、約二十万行という数字が示されています。この叙事詩の規模については吉田敦彦氏も、

『マナス叙事詩』は、その長さにおいてインドの『マハーバーラタ』をもしのぐ、世界で最も長篇の英雄詩である。

と指摘しておられます。この叙事詩の研究はソ連邦ではかなり早くから行なわれ、記録資料や研究文献も出版されています。又、西欧数ヶ国語にも訳されて、その存在が知られています。その『マナス』叙事詩が、中国領内のキルギス族にも伝承されていた、という

わけですよ。

中国では一九四九年の新中国成立後、言語調査を含む民族調査が行なわれました。その際、キルギス族の地区では『マナス』叙事詩も一部が採集・記録されました。その後さらに調査隊によって基礎資料の採集・記録が行なわれました。ところが先般の「文化大革命」の混乱期には、資料は散逸し、伝承者たちは迫害されるという事態に陥り、研究は停止を余儀なくされてしまったのです。「文革」が終って、『マナス』研究の陣容もやっとたてなおされることになりました。民間文芸界は緊急課題の一つに『マナス』研究をとりあげました。北京の中央民族学院の言語学者胡振華副教授（キルギス語学）を中心とするマナス研究チームが再建され、その一員として、キルギス族の語り手のジュスツプ・ママイ氏も北京に出歩いてきていました。私はちょうどこの時期に同チームを訪問する機会を得たのでした。

ジュスツプ・ママイ氏は、あごひげとやさしい目が印象的な好々爺でした。私は氏の『マナス』語りの一節を聞いたわけですよ。歌のように語りだし、あふれる泉のようにとどろくといつまでも続くそれは不思議な力で人をひきつけるものだと感じたものでした。

私はもとよりキルギス語は解しませんので胡振華先生に説明をお願いします、その後も幾度か研究室をお訪ねしてはお話をうかがいまし

た。中国語訳された『マナス』のテキストをさがしだし、その邦訳を試みるようになってからは、キルギス語から中国語への翻訳の際の問題点についても教えを受けました。こうして学んだことから、いくつかを述べようと思えます。

一

『マナス』は、マナス・セメテイ・セイテック・ケネニム・セイイト等のキルギス族の歴代の英雄たちを主人公とする英雄叙事詩です。キルギス族が、カルマック人等の異民族による支配に対抗して民族の独立と平和をかちとってゆく物語が韻文で語られるものです。

キルギス族の先祖は、紀元前よりエニセイ河上流域に住んでいましたが、のちに天山方面へと移動しました。中国の史書にも、「兩昆」(史記)、「堅昆」(漢書)、「黠戛斯」(新唐書)などの名で登場し、それらの記述から、長いこと匈奴や突厥の支配下にあったことがわかります。さらに時代が下ると、キタイやオイラート等の支配下にもおられました。叙事詩『マナス』にはこれらの史実が反映されているといわれます。

中国では、『マナス』叙事詩のうちで最も早くできた部分は、今から七、八百年くらい前の成立であろうと考えられています。

また、近隣の諸民族が伝えている伝承との比較研究によって、成立時期その他の多くの問題について新たな手がかりが得られるであろうと指摘されています。

例えば、『マナス』で語られる事件の多くはカルマック人すなわちオイラート人との戦いです。ところで、西モンゴルのオイラート

人に伝えられている長篇叙事詩『ジャンガル(江格爾)』に、コンダル(孔克爾)という英雄が登場します。そしてこれは『マナス』に出てくるカルマックの英雄コグルバイ(孔古爾拜)と同一人物ではないだろうかと予想されています。『マナス』叙事詩では、コグルバイはマナスの宿敵として描かれている人物です。互いに矛を交えた二つの民族が、それぞれの叙事詩の中で相手との関係をどのような伝承で伝えているかは興味深いところです。

二

さて、キルギス族には「ウルチ」と呼ばれる吟遊詩人の職があります。そして彼らによる即興の詩作や古典の詠誦は、詩歌を愛好する民衆に支えられて非常に盛んであるとききます。この「ウルチ」の他に、『マナス』語りの専門職として特に「マナスチ」と呼ばれて人々に敬愛されている人々がいます。前述の、『マナス』叙事詩二十万行を語れるというジュスツプ・ママイ氏はマナスチのひとりです。今年六十三歳になるママイ氏の略歴として次のような報告があります。

彼は幼い時から老人たちの昔語りになじみ、民歌を習うのも大好きであった。彼の兄のバルバイは民間伝承に関心をもち、採集者として各地に語り手を訪問しては自分も習い、そしてまた記録も作っていた。有名な語り手たちの語る『マナス』叙事詩についても、アラビア字母を用いて記録がなされた。兄の仕事は、ジュスツプ・ママイが後年マナスチとなる条件を整えた。

文字を覚えてからのママイ少年は、兄の採集した膨大な量の資料を読破し、十六歳の時にはすでに数十篇もの長篇叙事詩に通

曉し、『マナス』もほとんど覚えてしまっていたという。その後、牧畜業に携わり、教職にもついていたが、仕事のかたわら、『マナス』語りを続けてきた。……『民間文学』一九七九年第十一期所収、『民間歌手民間詩人簡介』より抄訳)

他にも、量的にはママイ氏ほどには語れないながら、曲調や語り口や修辭上のすぐれた特長をもっているという幾人かのマナスチの名も報告されています。

キルギス族の人々は祭りの時などにマナスチを招きます。マナスチは夜の白むまで語り続けることもあるといわれます。日常生活でも仕事の合間に『マナス』物語に詳しい人が一節を語ったり歌ったりします。新中国成立後はキルギス人の習俗も変ってきて、マナスチへのお礼もかつてのように駿馬や皮の上衣を贈ったり、高級料理でねぎらったりということまではしないようです。とはいうもののマナスチを招いた家では手厚いものでなしで謝意を表するというところで、程度の違いこそあれマナスチの重要性に変わりはないと思われまします。

マナスチの資格や継承の問題、共同体の中では役割など、マナスチの実態は、『マナス』の伝承の現状と共に、より詳細に調べる価値のある問題です。

三

今日、キルギス人はイスラム教徒ですが、イスラム教に接する以前はシャーマニズムの世界に生きていました。中国で採集された『マナス』叙事詩のうち、中国語に訳されて既に発表されている五千行ほどの部分だけ見ても、この点から考えてみるべきものが目に

つきます。例えば、アイチュレッカという名の王女が超自然的魔力を用いるシャーマンの様相を呈する場面が何箇所もあります。そして一方、その同じ人物が、戒律通りにタハーラ(洗浄)を行なう描写があったりするので。

『マナス』叙事詩に反映されている習俗から、シャーマニズムとイスラム教の習合の程度の問題や、現在のキルギス族の習俗に関する考察がなされれば、更に興味深い成果が期待できると思います。

四

キルギス語はアルタイ語族チュルク語群に属しています。『マナス』叙事詩はキルギス語の古語や方言の語彙・語法に関する資料の宝庫としても大いに注目されています。

『マナス』叙事詩は現在中国では、原語のキルギス語での記録資料がつくられ、同時に資料の中国語訳の作業が進行中です。資料が出そろってくれば、ソ連邦のキルギス共和国などで採集されたものとの比較も大いになされるでしょう。それによって、『マナス』自身の規模や構成もより明確になるでしょうし、中央アジアの遊放民の世界への理解もさらに深めていくことができるでしょう。

中国の『マナス』資料の充実が待たれます。

(いぬい ひろ・東京都立大学大学院)